

■研究プロジェクト



「日本文化創出を考える」 研究会

研究代表者：西本 清一

京都高度技術研究所理事長、
京都市産業技術研究所理事長、京大名誉教授

関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）は、そもそも学術や科学技術の研究のみをその使命とするのではなく、古には都として文化の中心であったこの地域に相応しい「日本古来の伝統文化」と「先端科学技術」の融合からなる新たな「文化活用力」を生み出していくことが求められている。それを実現するため、「文化」を都市名に冠する本地域において、日本文化は何かという視点での思想的な探求と、その活用のあり方を研究する。

研究目的と方法

京都はしばしば文化首都と呼ばれ、外から持ってきた材料を最も適した比率で調合し、優れた工芸品に仕上げる高度な技術が蓄積されてきた。京都で培われた伝統工芸の伝統は形を変えて今日にいたるまで引き継かれ、「京都ブランド」とも呼ばれる京都独自の輝かしい産業が発展してきた。

これから50年、200年先のことを考えると、進歩史観とは異なる歴史観や世界観を持たざるを得ない。文化を顕在化しないまま経済的な繁栄を求めてきたところに、文化に目を向ける一つの大きなチャンスがある。戦後の経済発展を通して置き去りにされた文化に価値を見出す時代を実現するためにはどのような施策が必要か、以下の視点からまとめる。

- ①「日本文化とは何か」という視点を中心に置き、様々な分野の専門家による多角的な分析を通して、「日本らしい」と言われるものが何故そうであるのかといった背景に至るまで、日本文化を思想的に探究し、更にはその活用のあり方を模索する。
- ②過去からの文化や技術と断絶し、最新の技術だけをベースに構想するのではなく、伝統的技術や技の活かし方、デザインの活用など、伝統と先端科学との融合を前提に構想する力を振り起こす。
- ③高等研が開いているけいはんな“ゲーテの会”において、本研究会としてけいはんな学研都市の市民に問いかけたいテーマを設定し、参加者との対話を通して文化活用力の強化のあり方について議論する。
- ④けいはんな学研都市立地企業等との文化力に係る共同研究可能なテーマを吸収し、将来的には実証試験等の実施や事業化に資するよう、より実践的な活用がなされる活動を組み入れる。

2017年度実績報告

2017年度は、1)研究会の基本構想の立案、2)「日本文化」および「文化力」についての仮説設定と検証、3)レポート作成の視点と全体ストーリーやまとめ方の整合、4)来年度継続テーマおよび個別ブレイクダウンテーマの検討、などに関する議論を行い、また伝統工芸や技術の伝承者に直接お話を伺うことにより、現状について理解を深めた。それから一年間の活動を総括して、以下の視点からレポートを発行した。

①生活活動に結び付く日本の文化

日本を訪問する外国人観光客の数が大幅に増えたが、彼らはみな日本の駅やトイレのきれいさに驚く。それは、生活は便利であるのみならず清潔で美しくなければならないという思いが日本文化の精神をなしてきたことと決して無縁ではない。日本の言葉には擬音語、擬声語が他の言語に比して多く、日本人はそのニュアンスを共有することができる。また、日本人にとっては直感や第六感が重要であり、それらは五感を習合した総合知であって、近代西洋の二元論による分別とは異なる日本文化の基盤にある。

②新しい日本の文化創出に向けて

今日の日本文化は、古代中国の文化に学び、それを万葉集以前の日本人の感受性、心の在り方に沿って日本風に変容させることによって発展してきた。文字はその典型であり、日本人にとってまだ異質なモノであった頃はカタカナ表記されたが、日本人の生活のなかに定着すると漢字表記や平仮名表記になる。日本らしさは「繊細で手が込んでおり匠の技が生きている」だけではない。他国にも非常に繊細で手が込んで匠の技が生きているものはあり、繊細さに加えて、日本という風土に由来する思想、環境、材料などが生かされていることが要件になる。日本文化を創出するという観点で見ると、日本の風土、文化は、すべて「何々になる」という、自然に時間をかけてそのようになるプロセスを持っている。文化というのは人々の生活や営みの中のものが凝縮されて形になっていくものであり、一旦受け取って、寝かせておいて、やがて200年、300年経つと文化になっているものともいえる。

③事例研究

日本で最も古い企業は578年の飛鳥時代に創業した建築会社であり、ヨーロッパの最古企業が1369年の創業であることと比較しても、日本には世界の中でも突出して古い企業が残っている。京都には堂々としたグローバル企業も多数あるが、そのルーツに伝統工芸があることがほぼ共通している。大きなインダストリーという文脈とはだいぶ異なり、焼物をどこかでボンと手でひっくり返すような、大量生産方式だけれども手工業的な要素が沢山入っていることで、世界の他の企業が作れないようなものを生み出している。これらはベンチャー企業のように思われているが、ゼロから生まれたわけではなく、京都伝統産業の一部を母体としているのである。

④日本文化の発信

日本の漫画やアニメの作りこみやストーリーの展開が、大人の視聴に耐えることが他の国にも認知され、ファンが増えてきているが、子ども向けの娯

参加研究者

氏名	所属・役職
西本 清一	京都高度技術研究所理事長、 京都市産業技術研究所理事長、京大名誉教授
内田 由紀子	京都大学こころの未来研究センター准教授
熊谷 誠慈	京都大学こころの未来研究センター特定准教授
高橋 義人	平安女学院大学特任教授、京大名誉教授
徳丸 吉彦	聖徳大学教授、京都市立芸術大学客員教授、 お茶の水女子大学名誉教授
長尾 真	国際高等研究所所長、京大名誉教授

※所属、役職は2017年9月22日現在のものです。



楽から始まった漫画を、手塚治虫以降の人たちが職人芸的に高め、いまや文化に昇華していきこうとしている。また、帯や着物の柄など過去からのものを積み上げて残している町家もあるが、全体としては散逸している状態であり、それらをデジタルアーカイブ化して世界に発信して行くことができれば、観光振興のみならず伝統産業の育成にも繋がっていくだろう。日本文化を伝承していくためには伝承者や職人の育成が重要であるが、伝統工芸にせよ邦楽にせよ間口が狭く敷居が高い、システマチックでアクセスのよい教育システムを整備することで世界への発信力を身に付けていく必要がある。

⑤日本文化創出のための京都のあるべき姿を考える

生産モードには、ユニバーサルにチェーン化され統一された中で動くシステムが存在する一方、京都のように、分散化されて個別で成り立っている企業が集合体をなしているところもある。新しい産業という点、どうしても大量生産の工業的なことを思ってしまうが、他方、いわゆる流れ作業の分業方式がある。これは、京都で確実に育ち、世界に伝播した生産方式である。日本、あるいは京都がリードするという、現代社会のビジネス的な発想になりがちだが、京都はどちらかというと共生する社会である。勝ち負けというよりは、リーダーのうちの誰かが言い出したことを100%否定せず、そこはやらうらいいだろうとなる。世代を超えて受け継いでいくために、京都では小学校でコミュニティの方も参加して色んな伝統的な事を教える。京都の中の子どもたちが京都によく通じているような状況がさらに盤石になれば素晴らしいことである。



今後の計画・期待される効果

研究成果の活用方向性として、「日本文化を基盤とした新たなモノ・サービスの創出」につながる何らかの成果をこの研究会から発信していくこととする。この目的を達成するには二つの視点が大切であり、一つは「将来の斬新なコンセプトが日本文化を基盤として提示できる」こと、もう一つは「過去から蓄積された日本文化の資産としての活用方策が示される」ことである。そのために、2018年度にはもう少し詳しいこと、具体的なことを議論していく。味などの食の問題、着物の柄などの衣の問題、さらに文化を広く捉え、鐘の音や楽器についても具体的に検討すべきと考える。また材料がなくなってしまったものについて、現代の材料で置き換えることがなかなか出来ていないが、それをどういう風に代替していけば良いかなどについても様々な議論をしていきたい。そういった視点に立ち、その先において、京都全体をダイナミックで生き生きとした先端的な学術・文化・芸術都市に育て上げるための方策を構築していきたい。さらには、文化力が社会に与える効果について検討していくことも必要である。京都という都市、京都の市民生活を文化・芸術力によってさらに良いものにしてゆく方策を検討していき、その上でそういった視点を盛り込んで、「先端的学術・文化・芸術都市宣言」を策定していくこととした。